

「安全工学」投稿規程

(昭和 37 年 4 月 1 日 制定) (令和 7 年 4 月 15 日 最終改訂)

1. 学会誌の目的

本学会誌は安全工学に関する科学と技術上の新しい発見、創造、理論、知識ならびに重要な経験、事例、調査結果などを広く会員に伝えることを目的とする。

2. 学会誌の内容（記事の種類）

本学会誌の記事は、以下に示す 18 種類よりなる。

2.1 安全への提言

企業などの安全関係の責任者、あるいは安全に関する研究開発の責任者などの立場からの提言。

2.2 総説

安全工学にとって重要なテーマを取り上げて、既発表の研究成果を骨子としながら解説・論評したもの。

2.3 論文

安全工学に関する独創的な研究で価値ある事実あるいは結論を含むもの。

2.4 技術ノート

論文に準ずる内容であるが、断片的な研究、現場の調査や実験などで新しい事実とデータを含むもの、あるいは重要な発明、発見、提案などで速報を目的とするもの。

2.5 トピックス

安全工学の関係者に有用な情報で、社会的なできごとなどを速報するもの。

2.6 資料

安全工学関係者が業務を行う上で必要なデータや情報を提供するもの。

2.7 災害事例分析

ある災害について、あるいは多くの災害事例のなかから共通するものを取り上げ、これら災害の内容を調査、分析したもの。

2.8 災害事例

最近話題となった災害を取り上げ、速報的に読者に紹介するもの。

2.9 図書紹介

安全工学の関係者に推薦できる図書を紹介するもの。

2.10 我が社の環境安全活動

各社の環境安全対策の担当者や安全工学の研究者の参考になるように、環境安全対策上の成果をあげた事業所、あるいは環境安全に特に留意している事業所の対策の実際を紹介するもの。

2.11 研究施設・研究活動紹介

安全工学をテーマに研究を行っている会員らの研究施設や研究活動を紹介するもの。

2.12 学術活動報告

安全工学研究発表会など学会が関与した学術活動を報告するもの。

2.13 新製品紹介

安全対策の向上に役立つような新製品を紹介するもの。ただし、法人会員に限り投稿できる。

2.14 事故・災害ニュース

社会的なニュースとなっている事故や災害についての情報を伝えるもの。

2.15 談話室

旅行記、見聞記、新しい情報の紹介、安全の歴史など自由な発想を簡単にまとめたもの。

2.16 安全工学用語

安全工学の領域で使われている用語、略語などについて解説するもの。

2.17 その他の項目

上記の項目に分類されない論説、評論、討論などの扱いは、掲載のつど、編集委員会で検討し新しい項目をもうける。

2.18 会告・会報

会告は学会から会員への連絡事項、関連学協会の情報など。会報は学会の事業報告などをまとめたもの。

3. 論文および技術ノートの投稿と掲載の条件

投稿は印刷物（電子出版を含む）として未発表のものに限る。掲載に際しては掲載料 80,000 円を徴収する。ただし、筆頭著者が本学会の会員である場合、または編集委員会が認めた場合は、掲載料を免除する。

4. 原稿の種類

原稿は、依頼原稿および投稿原稿の 2 種とする。ただし、論文および技術ノートは投稿原稿のみとする。

5. 原稿の作成

5.1 原稿の書式と体裁

用紙は、A4 判の縦置きで横書きとし、詳細は別に定める執筆要領に従うものとする。

5.2 用 語

論文および技術ノートは、和文もしくは英文とする。それ以外の記事は原則として和文とする。

5.3 原稿の長さ及び必要項目

- (1) 原稿の長さの限度は、編集委員会が特に認めた場合を除いて、いずれも表題、図、表、抄録、参考文献などを含めたページ数により表のとおりとする。
- (2) 図、表の合計数の限度は、図、表の番号でなく点数により表のとおりとする。
- (3) 各記事に必要な項目は表のとおりとする。
- (4) 規定の長さを超す原稿については編集委員会から短縮を要請することがある。
- (5) 論文および技術ノートについても(4)と同様に取り扱うが、やむを得ず超過する場合は、その超過分に要する費用（編集委員会によって定めた金額、1 ページ当たり 25,000 円）を掲載料とは別に著者から徴収する。
- (6) カラー印刷など多額の経費を要する場合、その実費は著者の負担とする。

表 原稿の長さおよび必要項目

記事の種類	頁数	図表点数 (最大数)	英文 表題	要旨	キー ワード	抄録
安全への提言	1	原則として 使用しない	○			
総説	7	10 点程度	○	○	○	
論文	7	10 点程度	○	○	○	○
技術ノート	4	8 点程度	○	○	○	○
トビックス	0.5	1 点程度				
資料	7	10 点程度	○	○	○	
災害事例分析	7	10 点程度	○	○	○	
災害事例	4	5 点程度	○			
事故・災害 ニュース	8	8 点程度				
図書紹介	0.5	原則として 使用しない				
我が社の 環境安全活動	4	8 点程度	○			
研究施設・ 研究活動紹介	4	8 点程度	○			
学術活動報告	4	8 点程度	○			
新製品紹介	0.5	1 点以内				
談話室	2	5 点程度	○			
安全工学用語	1	2 点以内				
その他 (論説・評論など)	7 以内	10 点程度				

6. 原稿の提出、審査

6.1 提 出

本文、図、表、写真、抄録などすべてについての電子ファイル（Word もしくは PDF、図・写真は JPG、GIF、PNG 推奨）を次の安全工学会あてに送付する。

電子ファイルの到着日をもって原稿受付日とする。

安全工学会

E-mail : jsse-2004@nifty.com

〒103-0025 東京都中央区日本橋茅場町 3-5-2

6.2 審 査

論文と技術ノートの原稿の採否は、論文審査小委員会が決定する。その扱いは別に定める。それ以外の記事の原稿の採否は編集委員会が決定する。編集委員会は審査の結果に基づき、原稿について訂正を求めることができる。

- (1) 編集委員会が訂正を要求した場合、執筆者は指摘された箇所以外の箇所に変更を加えてはならない。ただし、編集委員会の承諾がある場合はこの限りではない。
- (2) 訂正を求められた原稿は原則として1か月以内に再提出しなければならない。返却の日より1か月を過ぎて再提出されない場合は、投稿を断念したものと処理し、それ以後再提出された原稿は新規提出原稿として取り扱う。

7. 著 者 校 正

初校は原則として著者が行い、再校正以後は編集委員会が行う。この際印刷上の誤り以外の修正、図版の修正は認められない。校正刷りは受取後2日以内に返却すること。期限に遅れた場合は編集委員会の校正をもって校正終了とする。

8. 別 刷

別刷の追加を希望する場合は、著者校正の際、発行所から同封される「別刷申込書」に必要事項を記入の上、校正刷り返却時に申し込むこと。

9. 著 作 権

- (1) 本会誌に掲載された記事の著作権は安全工学会に帰属する。著者校正時に著作権譲渡契約書を併せて提出すること。
- (2) 著者が、掲載された自身の記事を自らの用途のために使用する場合は、その旨を本会に通知し、かつ、出典を明記すれば制限しない。
- (3) 第三者から、掲載された記事の転載などに関する許諾の要請があり、本会において必要と認めた場合はこれを許諾することがある。
- (4) 他誌からの転載、先行論文の引用などの場合、著者がしかるべき手続きを必ず行い、必要に応じて原稿に転載・引用の旨を記載すること。

10. 適 用

本投稿規程は、令和7年4月15日から適用する。

「安全工学」執筆要領

(昭和 37 年 4 月 1 日 制定) (令和 7 年 4 月 15 日 最終改訂)

1. 一般事項

原稿は文書作成ソフトウェアなどにより執筆する。用紙は、A4 版の縦置きで、表題部（表題、要旨、キーワード）は 1 段組、それ以外は 2 段組とする。2 段組の際の 1 段は、和文の場合 22 文字×47 行、英文の場合 10～12 ポイントの文字で 47 行とする。

詳細については、Web 上の投稿規程・執筆要領 (<https://www.jsse.or.jp/about/contribution/>) に原稿テンプレート (Word) が用意されているので参照すること。また同テンプレートの使用を推奨する。

2. 表題

(1) 原稿の第 1 ページに、下記の例に従い、つぎの事項を書く。

原稿種別、表題、英文表題（必要な記事のみ）、著者名[†]（ダガー）、[著者名ふりがな]、英文著者名（英文表題が必要な記事のみ）、連絡先（筆頭者でない場合）、原稿受付日、[†] 所属機関名、同所在地、E-mail（掲載希望の場合）。ただし、原稿受付日は本学会で記入するからあけておく。

例. 原稿種別：論文

安全についての実験的考察

Experimental Study about Safety (単語頭は大文字)

環境太郎[†]・安全一郎[†]

[かんきょうたろう・あんぜんいちろう]

Taro Kankyo[†] and Ichiro Anzen[†]

連絡先：安全一郎（筆頭者でない場合に記載）

年 月 日 原稿受付

[†] 安全大学工学部

〒123-4567 東京都中央区港 1-1

kankyo @ anzen-u.ac.jp（掲載希望の場合に記載）

(2) 表題は簡潔で一見して内容がわかるように工夫する。また、その 1, (I) など、あらかじめシリーズとなることを示すものはできるだけ避け、一編ごとに別個の表題とする。

(3) 表題は和文の場合は 25 字以内、英文の場合は 20 語以内とする。必要であれば、副題（制限同）を使用して良い。

3. 要旨

要旨が必要な記事では、本文を参照しなくても要旨

のみで内容がつかめるように本文と同一言語で第 2 ページに書く。和文の場合は 360 字以内、英文の場合は 300 語以内にまとめる。

4. キーワード

キーワードが必要な記事では、5 語以内のキーワードを要旨の次に書く。なお 2. ～ 4. の表題部（表題、要旨、キーワード）は約 1/3 ページに相当する。

5. 本文

- (1) 本文は原稿の第 3 ページから書く。
- (2) 本文の項目は、大項目 1., 中項目 1.1, 小項目 1.1.1, 細項目 (1) とする。箇条書きの行頭は「・」とする。
- (3) 和文は現代かなづかい、常用漢字を使用する。文体は和英とも、口語体で簡潔に表現する。
- (4) 図表を入れる場合は原稿に空白を作らず、本文中に図表の番号によって「(図 1 挿入位置)」のように記載し、その箇所を示す。図表は本文とは別にそれぞれ一括し、また図と表の重複は避ける。なお、図表の挿入位置は組版の都合で指定どおりとはならないことがある。
- (5) 外来語のうち、人名は原則として原文のままとし、すでに慣用化された地名、薬品名、術語などは和文としても良い。
- (6) 単位は国際単位系 (SI) を用い、必要であれば他の単位系を併記しても良い。記号、用語はできるだけ最近用いられているものとする。なお、本文中に使用する単位にはかっこを付けない。
- (7) 数式は論旨の展開に必要な最小限にとどめ、途中の展開経過は省略する。
- (8) 本文中に入れる数式は $a/(c+a)$, $\exp(kt)$ など、1 行で表現したものに限る。
- (9) 長い数式や複雑な数式は本文中には含めずに行を改めて書き、本文との間を上下とも 1 行ずつ空ける。やむを得ず数式が 1 段に収まらない場合は、図表に準じた扱いとし、別紙に数式を書き、本文中に挿入位置を記載する。

6. 参考文献

- (1) 文献を引用する場合は、「著者名^{1), 2)}」や「○^{1)~3)}」のように文献番号を本文

中の引用する箇所に記入し、文献名は(2), (3), (4)に従い末尾に一括して示す。

- (2) 参考文献は下記の例に従い、雑誌の場合、著者名、表題、雑誌名、巻数-号、ページ(発行年)、単行本の場合、著者名、書名、ページ、出版社、出版地(外国文献のみ)(発行年)の順序で書く。
- (3) 雑誌の名称はできるだけ略誌名を用いる。
- (4) Web ページなどのインターネット関連の引用はタイトルと URL と最終アクセス年月を書く。

例.

- 1) 環境太郎, 環境被害に関する研究, 安全工学, 45-1, pp. 44-48 (2006)
- 2) Johnson, D. A., Experimental Study of Burning Velocity, Comb. Rev., 88-1, pp. 1-6 (1998)
- 3) 安全工学協会編, 新安全工学便覧, pp. 162-174, コロナ社 (1999)
- 4) Thomas, M. G. and James, A. G., The Reliability of Analysis, pp. 143-144, A Publishing, London (1998)
- 5) 会誌“安全工学”, <http://www.jsse.or.jp/publication/>, 2025 年 4 月アクセス。

7. 脚 注

- (1) 脚注を使用する場合は、本文中の脚注を付ける箇所を*で示し、脚注は*を付けた原稿と同じ原稿の下部を横線で区切り、その下部に区別して書く。
- (2) 脚注はできるだけ簡潔な文章で書き、長文のものは付録にまとめるなどの工夫をする。

8. 図(写真), 表

- (1) 図は印刷用の原稿としてそのまま使用できる明瞭なもの(解像度 300 dpi 相当以上)とする。下部に図番号と説明を記す。図内の文字の大きさを配慮すること。ファイル形式は JPG, GIF, PNG が望ましい。
- (2) 写真は図と同様に取り扱う。下部に図番号と説明を記す。写真の番号が図の番号と重複しないこと。
- (3) 表は上部に表番号と説明を記す。
- (4) 挿入箇所は本文中に 5. (4) によって指定する。
- (5) 図(写真), 表のスペースは、既刊の安全工学誌を参考にし、原稿の長さが超過しないように配慮する。(ページ数は投稿規程を参照)
- (6) 図表内およびその説明は、論文および技術ノートでは英文、それ以外の記事では本文と同一とする。ただし、意図が伝わりにくくなる場合はその限りでない。
- (7) 図表の数は、投稿規程を参照すること。
- (8) 図表の体裁は、図表見本を参考にすること。

9. 抄 録

- (1) 本文が和文の場合は英文、本文が英文の場合は和文で書く。
- (2) 表題は、次の事項を書く。(下記に英文の場合の例を示す)
表題, 著者名, 所属機関名, 同所在地, E-mail (掲載希望の場合)
- (3) 抄録の文章の長さは、論文の場合には 300 語(英文時)または 360 字(和文時)以内、技術ノートの場合には 200 語(英文時)または 240 字(和文時)以内とする。いずれも、図、表を含んではない。
- (4) キーワードを 5 語以内で記入する。

例 Experimental Study about Safety (単語頭は大文字)

by Taro Kankyo[†] and Ichiro Anzen[†]

[†] Faculty of Engineering, Safety University, 1-1

Minato, Chuo-ku, Tokyo, 123-4567 JAPAN

kankyo@anzen-u.ac.jp (掲載希望の場合)

(1 行空ける)

This study is typical research of...

Key words: Safety Belt (単語頭は大文字), ...

10. そ の 他

原稿の体裁に問題があるものについては、編集委員会から修正を要請することがある。

11. 適 用

本執筆要領は令和 7 年 4 月 15 日から適用する。

図表見本 (英文の場合)

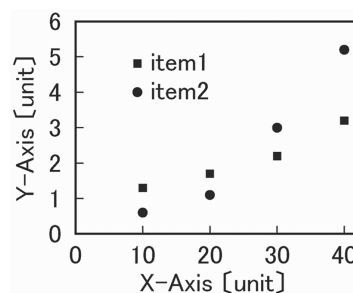


Fig.1 Relationship between A and B



Fig.2 Photo of sample

Table 1 Relationship between Factor and Item

Factor	Item 1	Item 2	Item 3
A	123	345	567
B	333	222	111
Total	456	567	678